

船の中で、乗組員の人たちはどんな生活をしているのか

多くの乗組員たちとの共同生活です

遠洋まぐろ延縄漁船の乗組員は20~23名で、そのうち日本人は6~7名、残りはみんなインドネシア人などの外国人です。そして、遠洋かつお一本釣り漁船の場合は26~33名の船員に対して日本人は10~15名ほどで、遠洋まぐろ延縄漁船と同じく、残りはみんなインドネシア人やキリバス人などの外国人です。まぐろ船・かつお船ともに、日本国籍の船なので、船長や機関長などの幹部船員は全て日本人ですが、同じひとつの船の上なので、外国人も含めて乗組員全員がコミュニケーションを密にして支え合い、そして、協力していかなければなりません。集団生活なので、一人のわがままがほかの乗組員みんなに迷惑をかけることにもなるのです。

船の中には、乗組員たちが休憩や睡眠をとる船室のほか、食堂やトイレ、風呂、洗濯機などがそなえられ、また、造水機も備え付けられていて真水も飲めます。

乗組員たちは、自分の就寝スペースにテレビやDVDデッキなどを持ち込んで、操業や漁具・機器の修繕などの仕事がない時間は、DVDやビデオを見たり、本を読んだり、みんなとお酒を飲んだりして、のんびりしています。船には乗組員の食事をつくるコック長（司厨長）も乗っていて、乗組員みんなの食事を作ってくれます。



【豆知識】遠洋まぐろ延縄漁業で使うエサいろいろ



コノシロ・鰯

【コラム】日本人は、いつ頃からカツオ・マグロを食べていたのかな？

貝塚などの発掘調査によれば、少なくとも縄文時代には日本人は、カツオ・マグロを食べていたようです。不思議なのは、カツオ・マグロのような大きな魚を、縄文時代の人たちがどうやって漁獲していたのかということですが、遺跡の発掘調査では、動物の骨を加工して作った釣り針が発見されていて、カツオ・マグロも、多くは釣りによって漁獲されていたものと思われます。でも、遺跡からは大型のマグロやクジラなど、フィッシングでは捕獲出来そうもない大きな海産生物の骨も見つかっていて、こういった大型の生物をどうやって縄文時代の人々が漁獲していたのか不思議です。もちろん、クジラは浜辺に打ち上げられることがあったでしょうが、マグロが、浜辺に打ち上げられるとは思えません。

この謎に対する答えのひとつとして、北海道や東北地方の遺跡から鉛に似た道具が出土しています。この鉛は、獲物に刺さると抜けない構造になっています。おそらく、縄文時代の人々は、こうした道具を使って、船の上から泳いでいるカツオ・マグロに鉛を投げつけて、捕獲していたものと推測されます。